67

谷川士清とその処方集に見られる水銀製剤

西井易穂
人・健康・医の研究所

昨年の本学会で「竹川竹斎と軽粉雑記」について述べ、伊勢勢和村で良質の辰砂が採鉱され、射和村で軽粉に加工されて、駆梅薬として使用されたことについて報告しました。伊勢地方は江戸時代優れた医師を排出していますが、本居宣長が小児科医であったことは一般的に認識されていない。宣長と同時代を産婦人科医として生きた国文学者谷川士清を知る人は数少ない。

士清は日本で最初の五〇音訓栞を編纂した人物です。宣長の先輩格にあたり、宣長が士清に教えを請うた多くの書簡が本居記念館に保存されています。私は偶々谷川家処方書のコピーを津市教育委員会から入手しました。百七十八頁に及ぶ貴重な資料です。江戸時代水銀はいろいろな治療薬として使用されていましたので、伊勢地方産出の軽粉、辰砂がどの程度士清の処方集に記載されているかに興味を持ち、調査してみましたので、ここに紹介します。

谷川士清は一七〇九年（宝永六年）二月二六日義章の子として津市八町に生まれ、幼名を昇、医号を養順と言います。一七七六年（安永五年）に没し、福蔵寺に葬られています。父も城下一の「はやり医者」で、養順も「難産の雌狸が来診にきた」という言伝えがあるほどの名医でした。一二歳のとき、すでに素問、霊枢を完読しています。皇學館付属図書館所蔵の書物に彼の疑問点が諸所に書き込まれていて、霊枢最後の頁に「享保五庚子年二月より同年極月吉日終谷川養順十二歳」と直筆の署名がありました。その資料を目にしたときは大変、興奮いたしました。二一歳から二六歳まで、京都に遊学し、福井丹波守から医師免許を受け、松岡玄達から本草学、医道、漢学を学んでいます。平賀源内、吉雄耕牛との交友により洋学を学び蘭方の摂取につとめ、当時の新薬の研究を進めたと郷土史家の

資料に記載されています。彼の処方集には蘭方より一時代前の紅毛流処方の記述が多く見られます。ただ、処方集最後の方に吉雄真？撰とあり、蘭名「ワワクハメセテセイン」との記述あり、霊丹　ソルビルマアト一分井花水百八十目という処方が見られ、黴毒骨折疼痛治療薬と記載し、別の頁に安永六丁酉年二月十日夜吉雄先生に桑名の駅に解逅すと記載されていることから吉雄耕牛と駆梅剤について話し合ったと思われます。また、処方中に私の曾祖父にあたる「右二方西井道仙より」と記述が残っている眼目指薬についての二種類の処方が記載されています、その一つには辰砂が処方されています。これなども士清の新薬好みの一端を示している証拠であろう。また、私の祖父格太郎が佐藤進に外科を学んだにもかかわらず、眼科医を選んだことがこの記述により理解できたように思います。

軽粉が用いられている処方は真珠丸、梅肉丸、七寶丸、七寶丹、八寶丹、小児忘乳法の六点あり、辰砂が処方に記載されているものが、一四点もみられます。

小児忘乳法は朱砂、軽粉を等量唾で両眉に塗れば、乳を思い出さずなどとの記載が見られ、寒中ココエサル方というのに、寒さを凌ぐ目的に辰砂を用いているなど興味深い記述があります。また延齢丹に辰砂が用いられていますが、家方延齢丹案として士清独自の処方がみられ、辰砂を用いて延命用薬として使用していた形跡が読み取れます。

水銀が関連している処方は三二種類もあり、江戸時代多方面の治療に水銀が使用されていたことが理解できます。